

恐竜及びマンモス化石のレプリカなどを購入して

館長 外間 正幸

昨年の11月に当館で開催された「失われた生物たち一大恐竜展」は、戦前戦後を通じて、かつてない催しであっただけに、非常な好評を博し、観覧者の総数が17万人を越えるほどの大盛況を呈しました。しかし、その反面、沖縄は離島が多く、一ヶ月の期限では離島の児童生徒に見てもらうことはできませんでした。

それで当館では、離島や僻地の子供たちにも見る機会を与え、また、本島の学生や一般の人々には常時見学できるように、恐竜化石レプリカなどの資料を購入すべく、会期中から計画をすゝめておりました。そして、ソ連科学アカデミーや日本対外文化協会と交渉を続けた結果、このたび購入が実現しました。

このたび購入したものは、カモノハシ恐竜・サウロロフス(モンゴル産・7千万年前・高さ7m)をはじめ、マンモス(シベリア産・20万年前・高

さ3.5m)、草食恐竜プロトケラトプス(モンゴル産・8千5百万年前)や1億年前の草食恐竜プロバクトロサウルス(中国産)など計10点で、購入価格は総額で1千5百60万円であります。

これらの化石レプリカを、特に沖縄のために譲ってもらったことは、当館にとって喜びにたえません。これもひとえに「大恐竜展」が成功したお蔭であり、関係各位をはじめ、ご観覧下さった多くの皆様に心から感謝を申し上げる次第であります。

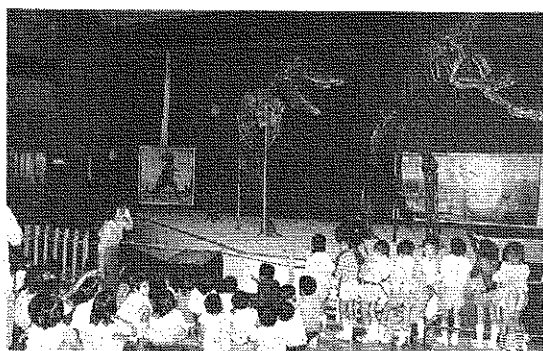
なお、レプリカは現在東京で補修を行っており、完成後マンモスは当館一階ロビーに、恐竜およびその他の標本は新たにオープンする「自然展示室」に展示し、秋頃から一般に公開したいと思っておりますので、それまでお待ちくださるようお願い申し上げます。

特別展ソ連科学アカデミー 『失われた生物たち—大恐竜展』

17万人が見学—県民の協力で成功裏に終る！

文化の季節を飾るにふさわしく、昭和55年11月1日から30日までの1カ月間（但し、10日と17日は休館）、当博物館において『失われた生物たち—大恐竜展』（ソ連科学アカデミー・日本対外文化協会・琉球新報社それに当館の主催）が開催された。

この特別展は、昭和54年2月以来、本土各地の主要都市で開催されていたもので、古生代（5億～2億7千万年）、中生代（2億～6千5百万年）それに新生代（6千5百万年以降）の地質時代の主要な化石標本類を一括展示し、県民に正しい地球発達の歴史を紹介することが目的であった。



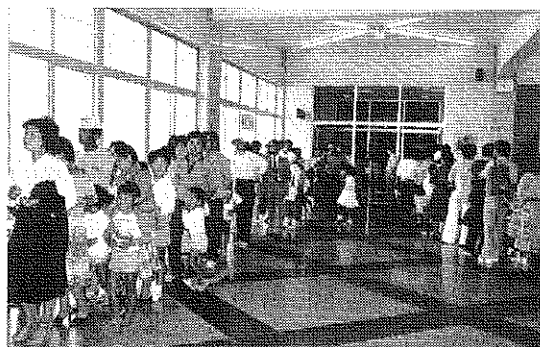
先生の説明に聞入る小学生（わあ—大きいなー）

展示品は、タルボサウルスなどの恐竜類をはじめマンモスのような大型ほ乳動物など、地質時代の代表的な化石の実物およびレプリカ標本など174点、生物の復元図および背景画など52点、それに解説および説明パネル39点で、展示室は生命の誕生に始まり、生物の進化や発達の様子が順序よくわかるような導線のために第1室→第5室→講堂を使用した。特に、第1室は常設展示品をすべて撤去して大改造を施し、また講堂は、400余席の固定椅子を取りはずして、恐竜類を自然に近い姿勢で展示したため、高くて広い天井に写しだされた影絵と共に真に迫力あるものとなった。

この特別展期間中に、県内の小中高校それに外人学校など136校からの約3万人の団体を含め、延べ166,445人が見学したことになる。しかし、1日に多い時で約18,000人もつめかけ、これは当初の目的を達せないばかりか、当館にとっては収容能力をはるかに越えており、今後大いに反省す

べきこととして残った。

なお、この特別展は、『地理的に遠隔な沖縄の児童生徒にも本土の児童生徒と同様の夢を与えたい』という気持ちから、ソ連科学アカデミーをはじめ日本対外文化協会の特別な計らいがあって実現したものである。さらに開催当日は、駐日ソビエト社会主義連邦共和国公使C.L. リュードビック氏やV.N. ニコライエビッチ三等書記官、それにモスクワから直接かけつけていただいたソ連科学アカデミー古生物学研究所のT.L. ペトロビッチ所長およびN.N. クラマレンコ前所長など、それぞれの方からごあいさつをいただいた。また、モスクワから特別展示品として草食恐竜プロトケラトプスの卵の化石を持参していただくなど、多大なご配慮をしていただいた。以上のことに関して心からお礼を申し上げます。



連日長蛇の列

特別展開催の初日（11月1日、土）には、県教育センターの講堂を借用して、特別講演会も実施した。講師は太田正道氏（北九州市自然史博物館開設準備室次長）と長谷川善和氏（横浜国立大学教授）で、演題は各々『琉球の自然と自然史博物館』、『日本の古脊椎動物と琉球列島』で行われた。参加者は約250人におよび、予定を1時間以上もオーバーするなど大盛況のうちに終った。

また、この特別展期間中に、多くの県民から化石のことについて質問があったし、さらに新しい化石資料の寄贈もあった。御協力に対して心からお礼を申し上げます。

（担当 大城逸朗学芸員）

義村朝義展開かれる



展示会場での文化講座

昭和56年の年明け最初の行事として、1月10日から25日までの間開催したのが「義村朝義展」である。

これは、故義村朝義の書画展で、昭和54年9月東京在住の長坂千代氏から寄贈された父朝義の書画50点の他、漆器・印鑑・写真などによって構成された。当館では、55年度予算で表装を新たにし図録などを作成してこの幕開けとなった。

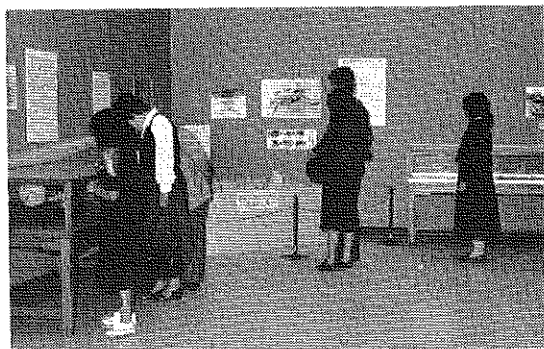
義村朝義は、琉球王族の一人で、廃藩置県から

日清・日露戦争の激動期に生き、さらに大正・昭和期にわたって活躍した、いわば歴史上の人物である。幼少のころから空手や棒術・剣道・馬術など武芸百般にわたって修業を積んだが、晩年は琉球音楽や書道・絵画まで芸道をひろげた。しかし、昭和20年3月、疎開先の大阪で空襲にあい、波瀾の生涯をとじた。

開館初日の10日の朝は、朝義三男の禎孝氏、東京からかけつけた三女の千代氏、孫娘のさと子さんが参列し、テープカットを行った。県教委からは金城教育次長ら関係者多数が列席した。テープカットに先だつて、博物館長から長坂千代氏に対し、感謝状が贈呈された。

また、会期末の24日の第82回文化講座では、比屋根照夫琉大助教授が「沖縄近代史の人物群像」と題して講演した。廃藩置県以後の脱清人を中心に義村家の一族にもスポットをあてた内容で、朝義展の会場内で行われたこともあって、とくに印象づける展観・講座となった。

渡名喜島の原始・古代展開かれる



展示場風景

昭和56年2月3日から同22日までの20日、渡名喜村教育委員会との共催で開催された。

同展は、昭和52年と昭和53年に村教育委員会によって、発掘調査された成果をまとめたものである。

展示には同調査で得られた村内各遺跡の出土品を時代順に配列し、それに対応して各遺の解説と発掘状況を写真パネルで配列し渡名喜島の原始・古代の生活がある程度想定できるように配慮した。

この他渡名喜島には、明治36年に施行された地割制がよく残っているため、地割遺構についても現況写真と地形図・古地積図でその概略を示した。

展示資料は、東貝塚・アーカル原遺跡・西底原BおよびD地点遺跡・アンジェーラ遺跡、里遺跡、南1号人骨出土地等の出土土器、石器、貝製品、陶磁器、古銭、鉄製品等の人工遺物と貝類、獣魚骨等の自然遺物、埋葬人骨1体の出土遺物、各遺跡の解説パネルと発掘状況の写真パネルである。また島の概況説明と航空写真等の写真パネル数点、地割遺構に関する地積及地形図等の展示も行われた。

会期中の21日には当真嗣一（文化課主任専門員）による「考古学上から見た渡名喜島」と題して文化講座が実施された。その内容は渡名喜島の原始・古代について概説した後、展示資料についての詳しい解説がなされた。同講座には那覇市在住の村出身者が多く参加したのが目立った。

—魅力のある博物館を—

池宮城 秀 意

戦前首里城内の北殿(ほくでん)に細々ながら郷土博物館があった。島袋源一郎(元小学校長)が館長で歴史研究に熱心な彼が蒐集した資料を展示してあった。信玄袋とアダ名されていた島袋源一郎が沖縄の教育界の人々の協力を求めて蒐集された多くの資料が展示されていたが、戦争でこれらの歴史資料は完全に碎破されたのである。

今の沖縄県立博物館は戦後の建設で、全くのゼロからの出発であった。したがって、現在の博物館の所蔵品は三十余年にわたって灰燼の中から蒐集されたものである。無論、沖縄県外に保存されていた歴史的遺品も補強されていることはいまでもない。それは今後も増えることが期待されるのである。

言うまでもなく、沖縄、琉球は日本、朝鮮、中国さらに南方太平洋諸島の接点であって、その地政学的な意義は大きく、沖縄県立博物館の内包する意味も大きい。

考古学上、また、民俗学上の出土品遺物も沖縄県立博物館には多く所蔵され、今後の研究、調査に俟つべきものが多いという。

千年以前に建てられたという正倉院の宝物の中には南方から持って来られたという香木(こうぼく)が今日でも所蔵されているが、これも琉球を通して南方から日本に渡来されたものといわれ、昔の琉球が南方と日本との接点になっていたということが物的に証拠立てられているということである。

そんなわけで、沖縄県立博物館は日本の発祥の足跡をたどることができる歴史博物館の性格を持つことができるということである。

日本には多くの博物館があり、ローカルごとの博物館も多いが、沖縄県立博物館はローカル博物館としても北と南を結ぶ歴史博物館として重要で、研究者にとって極めて興味深い博物館であるといえよう。

その点からしても沖縄県立博物館は日本の価値ある歴史博物館として認識されなければならぬはずである。

このような意味を持つ博物館として大いに魅力のある場所として、日本の北と南のつながりを資料を以って直接に展示できるものを沖縄県立博物館は持っているのである。このことを明らかに展示するように、われわれは学芸員の方々に願うものである。そのためには博物館が大きなスペースと潤沢な要員を持たなければならないと思う。

博物館が豊富な資料を十分なスタッフで駆使できるようにしなければならないだろう。博物館がただの展示場ではなしに、重要な社会教育の場であることを実現するために日本はまだまだおくられているようだ。

博物館が子供を含めて大人の教育の場でもあることを明らかにし、この施設の充実にこれからますます力を入れなければならないと思う。

(当館運営協議会委員)

博物館文化講座「南部の史跡めぐり」に参加して

花 城 可 盛

琉球の歴史に興味をもち、南部の史跡を見たいと思っていたところ、新聞に小さく案内が出ているのを見て、こんなチャンスはめったにないと思い早速申込んだ。

この日は、南部一帯は局地的に雨が降ったにもかかわらず定刻までには90人余の参加者が集った。

予定より少しおくれて博物館を出発、南山城を切りに嘉手志が一、港川遺跡、糸数グスク、玉城グスク、玉グスク、知念グスク、佐敷グスク等を見学した。案内役の名嘉、知念両先生の簡潔明瞭な解説を一言一句ものがさずきき、収穫の大きい史跡めぐりができた。

南山城は小高丘にあり、衛生グスクに囲まれた城で、近くには南山城滅亡の伝説で名高い嘉手志ガーが原形のまま使用されていた。

偉容を誇る城郭は今も昔の面影を残しているが城内は学校や鳥居があるのは、誠に残念であった。

米須グスクは外から見ると何のへんてつもない丘であるが、中には野づら積み of 石塁があり、郭

の内外からは貴重な遺物が採集できる。

港川遺跡へ行っておどろくことは、18,000年の間にできた陸層がはっきりとわかることである。

糸数グスクは管理が行とどかず、荒れ放題で見ることもできなかつた。玉グスクはアマミキヨが築いた沖縄最古のグスクといわれ今でも参拝者が後をたたないようである。城門が東北東に向っていることに興味がひかれた。

知念グスクは、神降り初めの城と謳われた霊場である。城門は東北東に開き城内には大木がおい茂り静寂である。城内の遥拝所は石があるだけで何も自然な姿が神秘的である。

今回の史跡めぐりで、琉球文化の偉大さを知ることができた、私たちの祖先が残した文化遺産に誇りを持ち、子らへ語りつげたいと思う。

最後に県や市町村がもっと史跡文化財の保存に関心を抱き充分なる管理をしていただくことを期待して止みません。

資料寄贈者御芳名

与儀清秀氏(那覇市)
屋比久サヨ子氏(那覇市)
岩田哲知氏(京都市東山区)
石田和歌氏(東京都日野市)
比嘉定寛氏(与那原町)
山城時計店美術部(那覇市)
宇茂佐富重氏(今帰仁村)
諸喜田茂充氏(琉大・理)
友寄英彦氏(那覇市)
宮里朝光氏(首里平良町)
木崎甲子郎氏(琉大)
仲村ふみ子氏(東京都中野区)
喜納賢栄氏(那覇市)
諸喜田武吉氏(アルゼンチン)
前田孝允氏(浦添市)
大城精徳氏(大里村)
城間得栄氏(東京都国立市)
金城章氏(那覇市)
上原新光氏(那覇市)
奥浜真昌氏(那覇市)

謝花寛立氏(那覇市)
古波蔵康治氏(南風原町)
宮城宏友氏(那覇市)
ジョージ・H・ケア氏(ハワイホノルル市)
又吉誠仁氏(大阪市淀川区)
吉原喜久子氏(石垣市)
大城吉正氏(名護市)
ウィリアム・クレメント氏
吉戸直氏(那覇市)
松久宗清氏(那覇市)
奥浜弘一氏(中城村)
岸本盛一氏(宮崎県日南市)
名護宏明氏(具志川市)
伊藤勝一氏(京都市下京区)
安江秀子氏(名古屋市)
山城盛行氏(具志頭村)
新嘉喜一氏(那覇市)
日本対外文化協会(東京都渋谷区)
平良民子氏(那覇市)
飯田満佐子氏(東京都渋谷区)

安次嶺金正氏(那覇市)
榎本正治氏(那覇市)
名幸芳景氏(那覇市)
松川満氏(那覇市)
安慶名常德氏(沖縄市)
金城次郎氏(読谷村)
真境名兼彦氏(那覇市)
翁長良明氏(那覇市)
池原清子氏(東京都北区)
池原喜英氏(那覇市)
島常賀氏(那覇市)
前竹宏伸氏(那覇市)
小波津忍氏(那覇市)
当間恵喜氏(石川市)
大城精徳氏(大里村)
新田卓磨氏(琉球新報社)
粟国善政氏(大分県大分市)
与那覇清友氏(那覇市)

S 54.6~S 55.3

昭和56年度特別展案内

(特別展) (◎は当館主催)

○琉染展

4月3日(金)～4月5日(日)
(首里琉染)

○中川伊作展

4月10日(金)～4月19日(日)
(中川伊作)

○琉浦書道展

4月21日(火)～4月24日(金)
(琉浦書道会)

◎新収蔵品展

5月12日(火)～5月31日(日)

○宮城健盛退官記念展

6月17日(水)～6月26日(金)
(宮城健盛退官記念展準備委員会)

○能勢孝二郎彫刻展

6月30日(火)～7月5日(日)
(能勢孝二郎)

◎沖縄群島両棲・爬虫類展

8月8日(土)～8月30日(日)

◎謝花雲石展

9月5日(土)～9月24日(木)

第3回移動博物館

会期 昭和56年5月15日(金)～5月17日(日)
会場 粟国村公民館
展示会 文化講座・映写会及びビデオ放映

第4回移動博物館

会期 昭和56年5月22日(金)～5月24日(日)
会場 渡名喜村中央公民館
展示会 文化講座・映写会及びビデオ放映

博物館へ車が寄贈される

このたび、博物館活動用として博物館友の会より車が寄贈された。これによって、今後、更に調査・収集活動を積極的にすすめ、管内にある資料の散失を防ぎ、博物館資料の充実をはかることができる。また、移動博物館にも充実した展示ができる等、車を加えた博物館活動による期待は大きなものがある。

昭和56年度博物館文化講座

時間 ▶午後2時30分～4時30分

会場 ▶当館講堂または特別展示室

85 4月25日(土) 菌の話
琉球大学助教授 中村 直

86 6月27日(土) 沖縄の系図について
那覇市史編集室 田名真之

87 7月25日(土) 博物館で描こう
琉球大学助教授 神山泰治

88 8月22日(土) ハブの話
県公害衛生研究所長 吉田朝啓

89 9月20日(日) 外部の史跡めぐり
博物館学芸員 知念 勇

90 12月19日(土) 冊封使の話
沖縄大学理事長 島尻勝太郎

昭和57年

91 1月23日(土) 沖縄の音楽一特に中国音楽とのか
かわりについて一
沖縄水産高校教諭 喜名盛昭

92 2月27日(土) 神々の島 久高
写真家 比嘉康雄

93 3月20日(土) 今帰仁城跡発掘調査の話
教育庁文化課主任専門員 金武正紀

特別講演会

10月18日(日) ◎これからの工芸デザイン
日本民芸館館長 柳 宗理

◎民芸の思想一展示品にふれて一
武蔵野美術大学教授 水尾比呂志

沖縄県立博物館だより No.10

発行年月日 昭和56年3月31日
編集・発行 沖縄県立博物館
住 所 〒903 那覇市首里大甲町1の1
TEL 0988-86-4353
84-2243